

ポール・ゴーギャン作『アレアレ』の鑑賞における、美的特性の感受と主題感受の調査研究―負の抒情をめぐって―

立原慶一

本研究のために、題材「ポール・ゴーギャン作『アレアレ』(1892年、75×94cm、オルセー美術館)の鑑賞」の実践を宮城教育大学附属中学校1年生2クラス78名並びに同2年生2クラス80名に対して行い、ワークシートを作成させるという形で授業を進めていく。

そこには「第一印象は何か」「表現方法の特徴を突き止めて、それから何が感じ取れるか(美的特性の感受)」「作品の主題として感じ取れるものは何か(主題の感受)」の3項目が課題とされている。回答の有無と美的特性感受の回数は、一切の曖昧さを帯びることなく明確である。そのため鑑賞能力を類型化し数値化する上で、客観的なデータとして処理されることになる。

本作品は部分的には鮮やかな色彩対比を基本にしつつも、全体に古びてくすんだ色調をもたらす両義的な表現性を特徴とするが、それは負の抒情を基調とすると見なしえよう。果たしてその情趣は中学生によって正当に感じ取られるのだろうか。

本実践研究ではこれに対抗させるかのように、この作品がキッチュ風に画像処理された参考作品を併せて提示する。それによって当該作品の造形的特徴と芸術的な革新性が際立ち、鑑賞体験をさらに深めさせる切っ掛けとなるに違いない。その点に今回、新たに試みる題材実践の意義と特徴がある。1年生並びに2年生に対して、両作品を相互に比較鑑賞させることによって、本作品に独自の表現性を実感させることができると思う。

ただしそこには課題的な困難さを伴うために、歴然とした能力差が現れてくるのも確かであろう。とりわけ思春期に当たる1年間という年齢差が、実年齢以上にこの鑑賞行為に及ぼす影響を探ってみようと思う。1年生が筆触(タッチ)や絵肌(マチュール)の活用をふんだんに盛り込んだ描写・彩色法における工夫に気付き、それらの表現効果をもたらす負の抒情を感受することは、参考作品と互いに対比させるという鑑賞法によって、果たして可能となるのであろうか。もしできたとして、その比率はどのくらいなのだろうか。この問題意識についてとくに関心が膨らむ。

今回の実践のポイントとなったのは、比較鑑賞することによって参考作品のキッチュ性を識別し、それを踏み台として当該作品に特有な、負的情趣を味わう事態である。それこそが本作品の芸術的価値だが、授業でそれを体験させようという筋道を目論んだ。

それができたのは1年生で11.5%、2年生で37.5%という結果が出た。両学年の間には3倍強に及ぶ差が認められた。とくに2年生にあつて、負の主題感受の類型(負の抒情派)が最大多数派を占めたことは、ゴーギャン作『アレアレ』が彼らの題材として適切であることを示していよう。

この事例を敷衍するならば、負の抒情が基調となっている作品は中学1年生にとって、鑑賞能力的に見て適格性を欠くということになる。これは今後における題材選定のための理論として、一般化されることになろう。